

このニュースは<http://sousou9.web.fc2.com> あるいは「相双地区九条の会フォーラム」

さらに「はらまち九条の会」で、1号から全号を見ることができます。

石橋

＜1957(昭和32)年10月4日は、ソ連の人工衛星スプートニク1号打ち上げ成功の日＞
ちょうど50年前、アメリカよりも早く、ソ連が世界最初の打ち上げの成功した。人工衛星は直径58センチ、重量83.6キログラムの球形で、約1時間35分で地球を一周。翌日にはライカ犬を乗せた2号を打ち上げにも成功。



この破片を拾うまでは、爆弾というのはそれが命中した所にあるものだけをぶっ壊すものと思っていた。それが八月九日の空襲で、破片は斧(おの)や鉞(なた)やまさかりとなつて飛び散り、人や物を傷つけ破壊し、その爆風も人や物を吹き飛ばし傷つけることを知らされた。昭和二十年八月九日、私は原町国民学校の三年生だった。

《八月九日原町空襲の時の私》
この日の空襲は町中まで狙っているように分かった。私の家族は裏の竹藪のそばに作っておいた防空壕へ飛び込んだ。

私は今、一個の小さな爆弾の破片を手に持ちながら、この文を書き始めている。破片は長さ二十センチ、巾三センチ足らずの小さなものだが、小さい割りにはずしりと重い。折れ口は菱形、つまり諸刃の剣の刃身を折り取ったようで、両側面は刃物のように鋭い。多少錆びてはいるが、今でも出刃代わりに、魚の頭を叩き切ることはできるし、ペーパーナイフのように紙を切ることもだつて簡単にできる。



爆弾の破片を持ちながら
菅野清二

《爆弾の破片》
私は今、一個の小さな爆弾の破片を手に持ちながら、この文を書き始めている。破片は長さ二十センチ、巾三センチ足らずの小さなものだが、小さい割りにはずしりと重い。折れ口は菱形、つまり諸刃の剣の刃身を折り取ったようで、両側面は刃物のように鋭い。多少錆びてはいるが、今でも出刃代わりに、魚の頭を叩き切ることはできるし、ペーパーナイフのように紙を切ることもだつて簡単にできる。

カラカラツと葉きようが竹にぶつかる音、ドドドーンと爆弾が発射する音、グワワーン、バリバリバリと機銃の音、グラマンが急上昇する時のエンジンの音、それ等の音が激しく錯綜する下で私は防空頭巾を被り、耳を親指で残る四本の指で目を覆って身を固くしていた。

空襲の後、母の顔に安堵感
《爆弾の破片を拾う》
そのうち、ドドーンと爆が揺るいだと同時に私達は壕の床にベシヤーンと押し潰された。一瞬、私は何もわからなくなつた。そして、ふと気が付くと心臓も動いていて体も動く。この時、私は生まれて初めて、「ああ俺は生きてる」という実感を持ったのだ。家族はどうなつたのだろうか、こわごわ目を覆っていた指をそうと開けると、壕の暗闇の中に母の顔が見えた。その時の安堵感と嬉しさは、六十年以上たつた今も忘れられない。

敵機が飛び去つた後に、外に出てみて驚いた。壕のすぐそばに爆弾の爆発で掘られた大きな穴ができていて、そこにあった畑は無くなつていた。周りの柿の木、杉の木、竹などがいるんな高さで鉞で切つたように切り取られていた。

生きていたのが奇蹟に思えた
そして、あちこちに爆弾の破片が落ちていた。壕の天井の空気孔から入つて来たあの爆風の強さ、それにこの破壊力。もしこの爆弾がもう数メートル近くに落ちていたら、私の一家は皆死んでいただろう。そう思うと、生きていたのが奇蹟のように思えた。死ななかつた、死ぬところだった、生きていて良かったという証に私は手頃な破片を一つ拾つた。それが今も大切に持ち続けているこの破片なのである。

因みに、その頃の私の家は原町女学校(現在の原町第一中学校)の近くにあり、戦後すぐ調べてみたら、学校の東や南に合計十二発の爆弾が落とされていたことがわかつた。

原町紡績工場は
まっ赤な炎をあげて燃え
夕方、原町紡績工場がまっ赤な煙と、まっ赤な炎をあげて燃え上がった。炎は赤くして猛烈に吹き上がった。その上昇気流に乗ってまっ黒な焼け布が幾万の鳥となつて赤い空を埋めつくして飛んでいた。

「何もかも壊されていく、無くなつていく」。私は無性に淋しくなつて涙ぐみながら、まっ赤な空と黒い布の鳥の群れをいつまでも見ていた。(裏ページに)

▲現在の国見団地のところにあった原町紡績工場
(原紡アルバム「皇紀二六〇〇年記念」より)



(表のページより)

《避難そして終戦》

その宵、まだ燃え続ける原町紡績工場を背に、石神の信田沢に避難した。農家の親類が無いので、本家の家族が避難している所に強引にもぐり込んだのだ。その夜はイグネの杉林の中に、蚊に食われながら寝た。

八月十日の再空襲はそこで見た。グラマンが急降下して爆弾を落とすのを見て、昨日はあの爆弾の下にいたんだなあ、今は安全な地にいる自分は幸せだなあと思つた。

次の日、暗いうちに(現在の鹿島区の上真野へ移動した。ここも知り合いの又知り合いという家に強引に頼み込んで、壁ぎわを貸してもらい、片屋根をかけて地面にゴザを敷いて寝た。十五日の終戦はここで知った。

町が明るくなり終戦をしみじみ実感

リヤカーを押しながら一気に十キロ以上を歩いて原町に入った時は夜になつていた。するとどうだろう。町が明るいのだ。



あの灯火管制で光一筋見えなかったまっ暗なあの町通りが、家からこぼれ出る光で明るいのだ。私はその時、「ああ本当に戦争は終わったんだ。死ぬようなこわさはもうないんだ」としみじみと思ひ、嬉しさで遠路を歩いた疲れも忘れてしまったのだ。

生活の小さな喜びにこそ

戦争の本質や悲惨さが

《戦争の惨禍とは》

私は長く小学校の教員をしてきたが、昭和五十年、復帰後間もない沖繩で開か

れた全国教研の平和分科会に出たことがある。そこでは広島や長崎の原爆、沖繩などの戦争や、各地の空襲等の戦禍の悲惨さが語られ、平和の尊さが訴えられた。そういう重い話の中では、私のように爆弾がすぐそばに落ちたが無傷だったなどという話は、空気よりも軽く感じられる。

でも、と私は思うのだ。農民が馬を徴発され、一家の柱の男が兵隊に取られ、若妻の夫が死に、疎開の子が飢え、仏具も鐘も徴発され、着る物食べる物もなかったこと等々とも含めて考えなければ、戦争の惨禍の全体像は見えて来ないのだと。そして、加害者としての真実の話も加えなければならぬ。

「子ども達を平和の語り部」

私はその教研で、子ども達が家の人に聞いた様々な小さいけれどその家の人にとっては大きな戦争にまつわる話を中心にまとめたレポートを、かなりのプレッシャーを感じながら発表した。「子ども達を平和の語り部」というのがレポートのタイトルだった。目を見張り、耳をそば立てるような内容など全然ないレポートだったがマスコミが取材に来た。

「よく普通の人の戦争の話が

平和を守る道につながる」

日本の大部分の人は、特別な惨禍を受けた人ではないと私は思う。しかし、その普通と思われ人、あるいはその周辺にいる人の話をよく聞くと、必ずといってよい程、戦争との関わりを持つていくものなのだ。私はその普通の人の話を綴っていくことと、大変だった人の話を結びつけていくことが平和を守る道につながると思つている。だから、会員の皆さんの話をいっぱい聞きたいと思うのである。

(九条の会会員・原町区北町在住)

○菅野さんのお話のように、こうした戦争体験や目撃した地元のお話を、ぜひ事務局にお寄せください。特別でない戦時中の普通の生活のお話こそ戦争の本当の姿があり、悲しみや残酷さ、決して格好良くない、絶対に美しくなんかない戦争の本質があるはず。そして皆さんで下記のように、早いうちに「はらまち戦争体験集」を編集し発行しませんか？寄稿やご意見をお願いします！

<はらまち九条の会総会>

来年2月3日(日)に開催

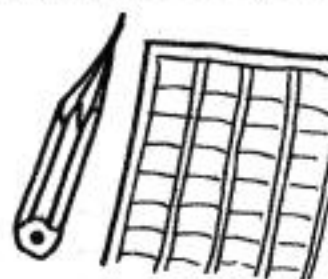
同時に吉原泰助先生講演会

(元福島大学長・福島県九条の会代表)

- 今年2月7日に高田健さんの講演会で好評でした。
- 来年は、大変に分かりやすいお話をされると定評があり、すでに小高、相馬、新地で講演会を開催されている吉原泰助先生をお呼びして、「憲法は押しつけか、時代遅れか」という講演会を開催する予定です。
- 県九条の会主催の「憲法塾」第2回、9月27日の吉原先生の講演の内容はこのニュース37号に掲載し、カセットテープも貸し出し中です。先生の長年のそのご研究の奥深さや、それでいて分かり易い、優しい語り口に、きっと皆さんも感動されることでしょう！



『はらまち戦争体験集』を 私たちの手で作りませんか？



というあつい会員の声が届いています。

たとえば原町でも、敗戦の直前米軍による激しい空襲があり、昭和20年2月16日に原町紡績工場で動員生など4名、8月9日に3名、8月10日原ノ町駅機関区で6名の鉄道員が殉死、他1名で計14名の犠牲者がでています。そのような空襲の体験や、目撃された方のお話、戦時中の衣食住の身近な生活ぶりなども、後世に伝える義務、また記録として残す必要があります。「市民の、市民による、市民のための」出版を皆さんで考えてみませんか。